

# JCA News

Japan Communication Association (JCA) Newsletter



日本コミュニケーション学会ニュースレター

日本学会協議協力 学術研究団体



## Contents

# 140

## 2025.11

1. 巻頭言 .....	1	学会賞(書籍部門)応募について	
2. 私にとってコミュニケーション学とは .....	3	第55回年次大会について	
3. 学術局からのお知らせ .....	5	事務局からのご報告とお願い .....	9
ジャーナルに関するお知らせ		5. 広報局便り .....	11
2025 年度ジャーナル掲載論文		6. 支部ニュース .....	13

日本コミュニケーション学会事務局

連絡先 <http://jca1971.com> 06-6624-0027 [jca1971@jca1971.com](mailto:jca1971@jca1971.com)

〒545-0021 大阪市阿倍野区阪南町1丁目50番3号(CR-ASSIST内)

## 巻頭言

### 人間のコミュニケーションを学んで

鈴木 志のぶ (北海道大学名誉教授)

この度 JCA ニュースレター巻頭言執筆の機会を頂戴しました。私は JCA がまだ CAJ だった 1995 年頃に会員になりましたので、今年は節目の 30 年目です。この春、勤務先の大学を定年退職し、この度 JCA に新設された「シニア会員」となりました。多くの年月が過ぎたのを感じます。この期間、私は学会に特に大きな貢献をしたという訳ではなく、一会員として活動してきたに過ぎませんが、他の会員の皆様同様、試行錯誤しながらコミュニケーションの研究・教育に取り組んできた一人として、この期間の研究・教育活動を振り返り、コミュニケーション学と JCA の今後を皆様と共に考えたいと思います。



コミュニケーション学を米国の大学院で学び始めたのは、私が英語教育および英語翻訳者としての仕事を通じて経験した、異文化コミュニケーションで感じる認識の「ずれ」のようなものに興味があったからだと思います。異国で留学生生活を送る過程では、自分自身がその研究事例となる場合があります。ある時、それは私がミネソタ大学大学院博士後期課程の学生だった時の博士論文 proposal defense (日本の大学院の博論趣意書検討会) の日のことです。proposal defense は論文着手前に、準備した博士論文の計画書を 5 名の審査委員に説明し、論文着手を認めてもらうための会です。会の開催直前に指導教員の先生が、気分はどうか、と尋ねてくださったので、私は「まな板の上のコイ」の心境であると答え、それがどういう例えかを先生に説明しました。ふむとそれを聞いた先生は、我々ならそれを“cornered tiger” (追い詰められた虎) と言うと述べたのち、私の「？」の表情を察して次に “We fight back!” と続けました。コミュニケーションの Rules 理論の観点から見ると、私はその会をおそらく「学識豊かな審査委員の先生方の意見を聞く機会」と捉え (constitutive rules = 構成的規則)、自分に期待される行動を「しっかりと意見を聞く」 (regulative rules = 統制的規則) と考えていたように思います。計画書に対する批

判への反論が不十分だったせい、合格はしたものの、あまり良い出来ではありませんでした。先生方が考えるその会の定義（構成的規則）と私のとるべき行動（統制的規則）は、私の考えるそれらと明らかに異なっていたと、今では理解できます。

以上のような失敗も経験しながら学位を取得後、日本の大学で職を得て、それ以来コミュニケーション研究に従事してきました。私の研究は大半が実証主義的研究で、コミュニケーションの構成概念とその測定、異文化間等価性、議論の構造分析、異種グループ間のコミュニケーションを通じた合意形成等のテーマに取り組みました。研究は順調な時ばかりではなく、論文の査読を通すのに失敗し、大きく落胆する思いも何度も経験しました。しかし、その都度、理論と過去の文献を学び直し、研究計画・分析方法・結果を冷静に見直す等から、ある時は良いアイデアが浮かび、嬉しい発見の瞬間も経験しました。また、それらの作業を通じ、足りないところを反省し、合理的に考え、謙虚である、ということ自分を言い聞かせることはできたように思います。これから研究の道を歩く若手の皆様にも、同様に良い経験が待っていることと思います。

教育についても一言申し上げます。勤務していた大学院（学部のない独立研究科）ではコミュニケーション学を教えていました。日本でコミュニケーション学を教えることの難しさに関しては、JCA 会員の皆様とおそらく問題意識を共有していると思います。安心して若い研究者が多く育っていけるように、今後、コミュニケーションの分野をより魅力的にして学生を教育することは、引き続き私たちの学会の課題の一つだと思います。特にここ 10~20 年は科学技術の進歩でメディア環境が激変し、コミュニケーション研究でも注目を集めるトピックが変化して来たように思います。それらの変化をうまく取り入れつつ、データ分析を含む研究手法など、社会でも広く応用できるスキルも合わせて学生に教育することなども、考え得る一つの方向性かと考えます。

JCA は、コミュニケーションの学会として今後も様々な問題に直面することと思います。それでも、会員の皆様が努力と対話を通じてそれらを乗り越えて行くことと期待しています。We will fight back !

## 私にとってコミュニケーション学とは

周 曉妍 (関西大学)

コミュニケーション学に対して、一言で感想を言うと、私にとって「楽しさ」と同時に、「苦しさ」も味わせてくれる学問です。

その「楽しさ」は、コミュニケーション学そのものの学びに触れるときです。私はもともと中国の大学で日本語を専攻していましたが、「日本語に浸る」環境を求め、提携していた日本の大学に留学しました。その中で、社会心理学の授業を受講し、そこで学んだ対人コミュニケーションに関する内容に興味を持ちました。なぜなら、それは単なる本に書かれた知識ではなく、

日常生活の中で、肌で感じた内容だったからです。例えば、日本人の学生に「あと6枚の紙が必要」と指折りを見せた時、相手に困惑されました。その時、「あ、ジェスチャーが違うんだ」と気づきました。また、学校イベントのスタッフとして駅前でパンフレット配るときに、「よろしくお願いします!」と近づいて渡そうと思ったら驚かせてしまい、「距離が近すぎたのか...」と反省しました。こうした経験を通じて、授業で学んだ非言語的コミュニケーションを初めて実感しました。

さらに、ゼミの飲み会で、カレーの汁が留学生の友人の目に飛び散ったときに、「大丈夫?」と日本人の先生に聞かれて、「大丈夫です。ただ目がちょっとからいです」と答えた友人に、先生が「目がからい?」と戸惑ったことがありました。「目がからいという感覚は日本人にはないの?」と思ってネットで調べてみると、「目がヒリヒリする」という表現の方が正しかったことを知りました。中国語の表現「眼睛有点辣(目がからい)」は、自分からしたら比喩表現もなく刺激を受けた感覚を素直に伝える言い方なのに、外国語になるとこんなにも通じないんだと、外国語でのコミュニケーションの奥深さ面白く感じました。

これらの経験は、全部留学の日常で体感した日中文化差で生まれたコミュニケーションで、「異」があるからこそ発見でき、楽しさを味わえたのだと思います。しかし、そのような経験には、相手の予想外の反応に感じた気まずさや、「同」を求めるために同調するかしないかと迷ったりする苦しさも伴っています。



現在、私は在日中国人留学生（以下、「留学生」）が抱くメタステレオタイプについて研究しています。メタステレオタイプは、俗にいうと、「自分たちが他の人たちにどう思われているかについての思い込み」です。人がメタステレオタイプを抱くと、その内容によって相手の集団への態度や接し方、また自己呈示の方法まで変化し得ます。留学生の中で、文化的な「異」に耐えられなかったり、日本人の相手に悪い印象を持たれることを心配したりする場合、多少メタステレオタイプの影響を受けているのではないかと考えて調査を始めました。しかし、研究を進める中で一つ気づいたのは、「日本人とは違う」経験からネガティブなメタステレオタイプを持つようになり、不安のあまり日本人のマネをして振舞うしかないという状況に置かれた留学生が多かったことです。このような「同」への追求は果たして良いことなのか、またネガティブなメタステレオタイプを回避して円滑なコミュニケーションを行うにはどのような解決策があるかといったことを、今研究を進めながら模索しています。

「求同存異（基本的な共通点を求めつつ異なる意見を残しておく）」という中国語の諺がありますが、私にとってのコミュニケーション学は、この諺のように、共通への追求と差異への尊重から成り立つ学問だと思います。私自身の研究でも、留学生が「異」に耐えられずメタステレオタイプを生じる際に、どうすればコミュニケーションの場において相手と同じペースを保ちながら、自分と他人が異なっていることが許されないのではないかと不安を解消できるか、その方法を探ることを今後の研究の方向づけとしています。

## 学術局からのお知らせ

### ジャーナルに関するお知らせ

『日本コミュニケーション研究』(Japanese Journal of Communication Studies)は、同一巻の第1号と第2号を同一年度内に発行できるように調整し、第54巻第1号が2025年7月に発行されました。第2号は、2026年1月発行にむけて編集作業を進めております。研究論文に加え、第54回年次大会の論考が掲載予定となっています。また、第55巻第1号への投稿が9月末に締め切られ、新規投稿9本の論文が投稿されました。こちらは2026年7月発行を目指し、その後の作業が進められています。

現在は、第55巻第2号(2027年1月末発行予定)への投稿論文を募集中です。締め切りは2026年3月末日ですので、是非皆さまの研究結果を論文としてご投稿ください。投稿は、ワード等で作成された「論文」「シノプシス」「ファイル作成に使用した機種を加えた著者情報」の3つのファイルを添付して、以下の指定メールアドレスに送付するという形をお願いいたします。投稿や執筆の詳細につきましては、公式ホームページにある最新の「研究論文集投稿規程」「学会誌執筆要項」をご参照ください。投稿される際は、ジャーナル専用アドレスに送付をお願いいたします。

メールアドレスは以下の通りです。

To: journal [@を入れる] jca1971.com

上述したメール投稿で受領の返信がない等の不具合、また、ジャーナル投稿に関するその他のお問い合わせは、ジャーナル専用アドレスまでご連絡ください。可能な限り迅速に対応いたします。皆さまのご投稿を心よりお待ちしております。

### 2025年度ジャーナル『日本コミュニケーション研究』掲載論文

『日本コミュニケーション研究』第54巻第1号(2025年7月発行)

#### 研究論文

郭 仁敬：若者の友人関係におけるコンフリクト行動—シンボリック相互作用論を理論的視座に置いて—  
谷島 貴太：シフターとしての通知—指標性とオリゴのメディア論的解釈を通して—

今後も充実した『日本コミュニケーション研究』の発行に努めてまいりますので、皆さまからのご投稿、ご協力をお願い申し上げます。

(副学術局長：ジャーナル担当 内藤 伊都子)

## 学会賞（書籍部門）応募について

- ・ 対象：本学会正会員によるオリジナルの著作のうち、過去5年間に応募していないもの。共著・分担執筆作品は、全執筆者がJCA 会員でなくともよいが、著作へのJCA 会員の貢献が顕著と認められるもの。
- ・ 締め切り：2025年12月31日(消印有効)
- ・ 応募資格：JCA 正会員(2025年度までの会費を納入していること)
- ・ 応募方法：審査用の著書3冊、および100字程度の著作概略および著者の名前・連絡先情報（著書の返却はなし）
- ・ 応募数量：会員一人一冊(自薦、他薦問わず)
- ・ 問い合わせ先：下記2名に同報送信  
学術局長 松本健太郎 mt\_kentaro[@を入れる] dokkyo.ac.jp  
副学術局長 内藤伊都子 naitoitsuko[@を入れる]sz.tokoha-u.ac.jp
- ・ 審査書類一式提出先：学術局長 松本健太郎  
住所：〒340-0042 埼玉県草加市学園町1番1号  
獨協大学外国語学部英語学科松本健太郎研究室  
電話：090-6540-6727  
E-mail: mt\_kentaro[@を入れる] dokkyo.ac.jp

## 第55回年次大会について

### 【大会開催要項】

- 日程 2026年5月下旬～6月上旬（調整中）
- 場所 二松学舎大学（関東支部開催）
- テーマ 「東アジアからのコミュニケーション研究：西洋パラダイムの多元化に向けて」

### 【募集内容】

- 応募締切 2026年2月1日
  - 申し込み方法 Google フォームによる申込  
下記の申込フォームから必要事項を入力し、以下二つのファイルをアップロードする。
    - (1) プログラム掲載用要旨（「要旨」）
    - (2) プロシーディングス用原稿（「原稿」）ひな形は学会 HP 掲載の最新版を必ず使用すること。ひな形を使用していない場合、修正・再提出を求める場合がある。  
申込フォーム：  
[https://docs.google.com/forms/d/1E1THp6sSwGedkLmEo\\_FK7ouFFPw-ZXZj4liXfUKbVYY/preview](https://docs.google.com/forms/d/1E1THp6sSwGedkLmEo_FK7ouFFPw-ZXZj4liXfUKbVYY/preview)
  - ※ 送信後に申込内容の控えが自動送信される。必要に応じて再編集が可能。
  - ※ 早期の採否連絡を希望する場合は、フォーム内の該当欄に理由を記載すること（早期連絡を確約するものではない）。
  - 応募・問合せ先 副学術局長 谷島貫太(大会担当、二松学舎大学)  
下記2名に同報送信  
学術局長 松本健太郎 E-mail：mt\_kentaro[@を入れる]dokkyo.ac.jp  
副学術局長 谷島貫太 kanta.tanishima[@を入れる]gmail.com
- 募集①「研究発表」：質疑応答を含む30分程度の、論文発表を前提とした研究発表。
- 募集②「パネル発表」：統一テーマについての90—120分程度の研究発表。
- 募集③「企画セッション」：会員相互の研鑽や情報交換を目的とした90—120分程度の自由企画。形式はパネルディスカッション、ワークショップ、模擬講義など。その他の企画案も可能で、学術局にご相談のこと。

## ○ 応募資格「研究発表」：

1. 単独発表の場合はJCA正会員であること。\*
2. 共同発表の場合、筆頭著者がJCA正会員であること。
  - 2.a. 筆頭著者が正会員（一般会員）である場合、著者の半数以上が学会員であること。
  - 2.b. 筆頭著者が正会員（学生会員）である場合は2.a.の条件は当てはまらない。
3. 共同発表の場合には、筆頭著者が当日の口頭発表代表であること。
  - 3.a. 筆頭著者が正会員（一般会員）である場合、口頭発表者の半数以上が学会員であること。
  - 3.b. 筆頭著者が正会員（学生会員）である場合は3.a.の条件は当てはまらない。
4. 研究発表を行うJCA正会員は申込時に2025年度までの会費を納入していること。

※ 準会員の発表資格については現在検討を進めている最中であるため、発表を希望する準会員は事務局にお問い合わせください。

## 「パネル発表」：

1. 司会がJCA正会員であること。
2. パネルにおける発表が単独発表の場合は、発表者はJCA正会員であること。
3. パネルにおける発表が共同発表の場合、筆頭著者がJCA正会員であること。
  - 3.a. 筆頭著者が正会員（一般会員）である場合、著者の半数以上が学会員であること。
  - 3.b. 筆頭著者が正会員（学生会員）である場合は3.a.の条件は当てはまらない。
4. パネルにおける発表が共同発表の場合には、筆頭著者が当日の口頭発表代表であること。
  - 4.a. 筆頭著者が正会員（一般会員）である場合、口頭発表者の半数以上が学会員であること。
  - 4.b. 筆頭著者が正会員（学生会員）である場合は4.a.の条件は当てはまらない。
5. パネル発表にて発表を行うJCA正会員は申込時に2025年度までの会費を納入していること。

## 「企画セッション」：

司会がJCA正会員であること。JCA会員以外が参加する場合は、応募の際に参加者としてふさわしい理由と参加の正当性を明記すること。JCA会員は申込時に2025年度までの会費を納入していること。

発表の採否の連絡は3月下旬頃を予定している。なお、パネル、企画セッションについては、特別な理由があって早い時期の採否連絡が必要な場合は、その理由を応募の際に明記すること（ただし早期の採否の連絡が確約されるわけではない）。

## 【採否連絡】

発表の採否は2026年3月下旬に連絡する。

## 【個人情報の取り扱い】

申込情報は大会運営および連絡の目的に限って使用し、適切に管理する。

(事務局大会担当 谷島 貴太)

## 事務局からのご報告とお願い

1. 2025 年度 JCA 総会が 6 月 7 日(土)に、広島修道大学会場で開催されました。

2. 会費納入のお願い

ジャーナル送付時に年会費の振込用紙を同封しました。納入がお済でない方は、お早めにお振込みくださいますようお願い申し上げます。

3. 学生会員・準会員登録申請締め切り

大学院生対象の学生会員、学部生対象の準会員としての登録は 7 月末日をもって締め切りしました。前年度学生 会員または準会員であった方で、新たに登録をされなかった方は自動的に一般会員に切り替えますのでご了承ください。なお、すでに今年度の学生会員または準会員の会費を振り込み済みで登録をされなかった方には差額を請求させていただきます。

4. シニア会員への切り替え

生年月日の登録があり 2025 年度年会費請求時に 65 歳以上の会員は自動で切り替え、シニア会員の会費 (5,000 円) を請求させていただきました。また、お申し出のあった会員につきましても、シニア会員に切り替えました。65 歳以上の会員の方でシニア会員への切り替えがお済でない方は、以下のリンクからお知らせいただくか、事務局までご連絡ください。

<https://forms.gle/Qdnd6AdH1j52gHmj9>



5. 複数支部選択方法

会則第 14 条で、「原則的にその居住区に基づいていずれかの支部に所属する」とありますが、居住地や勤務地に関わらず、希望する支部に最大 2 つまで所属することができます。そ

それぞれの支部活動の内容などを参考に、所属を希望する支部を選択いただき、活発な学会活動にご協力いただけますと幸いです。現在の支部に追加して、他の支部への所属を希望される場合は以下のフォームよりご連絡ください。

<https://forms.gle/yxEzi8FUrCAEDVmp8>



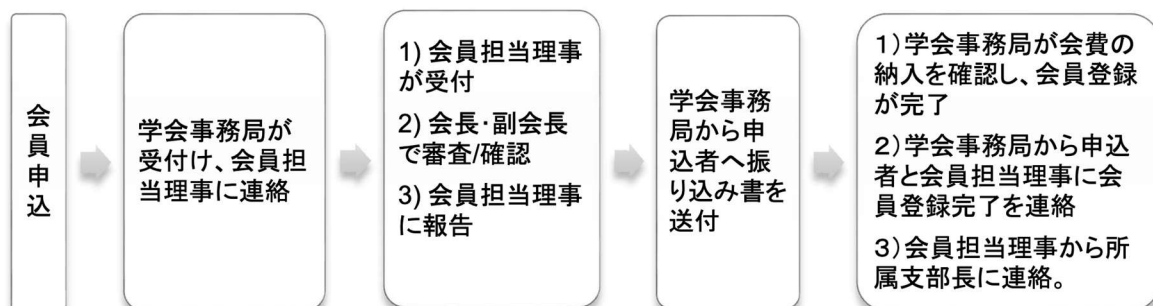
## 6. 理事会の開催

去る 2025 年 10 月 12 日（日）に、JCA2025 年度第 2 回理事会が開催されました。議事録は ML で会員向けに後ほどお伝えいたします。

## 7. 新規会員の手続き

JCA では新しい会員を随時受け付けています。下記のような流れで、新規会員の手続きを行います。ご不明な点がございましたら、学会事務局までご連絡ください。

皆様のご協力をお願い申し上げます。



### 事務局連絡先

〒545-0021 大阪市阿倍野区阪南町 1 丁目 50 番 3 号 CR-ASSIST 内  
日本コミュニケーション学会事務局  
メールアドレス：jca1971[@を入れる]jca1971.com  
電話番号：06-6624-0027

## 広報局便り

### 1. 新刊情報提供のお願い

広報局としては、会員の皆様の新刊情報を学会公式 X[旧 Twitter](@jca\_1971)および ML で発信・配信していきたいと考えております。また、今後学会ホームページで会員の皆様のご著書を積極的に紹介していく予定です。自薦、他薦を問わず、新刊のご著書に関する情報—ご著書名、出版社、ISBN 情報—をお寄せいただきたく、お願い申し上げます。ぜひ、ご検討ください。

※学会ホームページに記載されている「基本方針」に合致しないものに関しては、学会公式 X 等での発信をお断りする場合がございます。ご了承下さい。

<http://jca1971.com/keynote>

### 2. 広報局からのお知らせ

- ① 広報局では ML をもちいて、学会 HP における掲載情報を中心に会員の皆様あての情報配信をおこなっております。
- ② 広報局では各支部や各研究会の情報、他学会や教員公募などの情報も、ホームページにアップロードしていきたいと考えております。ぜひ、情報をお寄せください。アップロードする文面については、タイトルを含めて完全原稿をご準備ください。
- ③ 皆様からも、国内だけでなく、海外の学会を含めて関連する講演会や研究会があれば情報として広報局までご一報下さい。ホームページにアップロードしたいと思います。アップロードする文面については、タイトルを含めて完全原稿をご準備ください。
- ④ ホームページ (<http://jca1971.com/>) は、適宜更新しております。ご意見やご質問を頂ければ幸甚です。
- ⑤ JCA 公式 X[旧 Twitter](@jca\_1971)も適宜更新しております。是非フォローをお願いいたします。

(広報局長 小西 卓三)

## JCA ニュースレターへのご寄稿のお願い

日本コミュニケーション学会では、ニュースレターへの会員の皆様のご寄稿を募集しております。以下の要領で奮ってご寄稿ください。宛先：田島慎朗 (tajima-n[@を入れる]kansai-u.ac.jp)

### ① 著書紹介

会員の皆様の著書を紹介するコーナーです。自薦、他薦を問わず、会員の皆様の著書をご紹介ください。和文・英文で1枚程度（A4）の原稿を受け付けております。

### ② コラム：コミュニケーション教育

コミュニケーション教育に関する実践報告、事例紹介、展望、論考、その他のエッセイを受け付けています。

和文・英文で1枚程度（A4）の原稿を受け付けております。

### ③ NL 表紙の写真

ニュースレターの表紙を飾る写真を募集しております。本学会のNL表紙に相応しい写真がございましたら是非お寄せください。（写真は、会員の皆様ご自身でお撮りになったもの、または著作権をお持ちの写真に限ります。また、写真内容が法令に触れないようご配慮ください。）

## 支部ニュース



## 北海道支部



(支部長 佐々木 智之)

北海道支部では秋の研究会を以下の要領で開催する予定です。

タイトル：2025 年度 JCA 日本コミュニケーション学会北海道支部大会

日時：2025 年 9 月 27 日 (土) 14:00~17:30

場所：北海道科学大学 図書館1階

日程とプログラム

- (1) 2:00~3:15 講演  
(3:00~3:15 質疑応答)

テーマ：全国の現場から見てきた  
生成 AI 活用の最前線とこれからの学び  
講師：札幌国際大学基盤教育部

准教授 安井政樹 先生

- (2) 3:30~3:50 支部総会

- (3) 4:00~4:30 研究発表

テーマ：スローで間のある時代遅れの

コミュニケーション活動

発表者：北海道科学大学 教授 佐々木智之

- (4) 4:40~5:30 パネルディスカッション

テーマ：AI 教育とコミュニケーション

講演の主旨：全国の現場から見てきた

生成 AI 活用の最前線とこれからの学び

AI ドクターや AI チューターによって、病気の診断を受けたり、また外国語の会話練習をしたりすることができる時代となりました。精神的に悩みを抱えている者が、AI カウンセラーに相談する危険性を指摘している論文も見られます。特に教育においては、十分な配慮が必要なものの、AI を利用する分野の可能性は無限のように思われます。人と AI が混在するコミュニケーション環境における教育の将来を展望します。

研究発表の趣旨：スローで間のある時代遅れの

コミュニケーション活動

大学におけるコミュニケーション能力の育成を考えると、就職活動のような実用性に重きを置いてしまうと、面接での流暢さやグループディスカッションでの活発なやり取りが目標になりがちです。はたしてそれはどんな学生にとっても有意義なのでしょうか。SNS や生成 AI による高速で高度な情報通信が加速する時代に、あえて少人数や個人で速度を落として取り組む活動を試行しました。活動実践例（聴衆のいない朗読、ラジオ番組もどき、群読、筆談など）を紹介しながら、コミュニケーション能力育成のあり方について共有する時間になればと思います。



## 東北支部



(支部長 宮曾根 美香)

東北支部では、2025 年度秋冬の研究大会と春の定例研究会をオンラインで実施することになりました。2025 年 12 月 13 日 (土) に東北支部第 26 回研究大会を開催いたします。

基調講演に金井辰郎先生(東北工業大学ライフデザイン学部経営デザイン学科教授)をお招きし、

「ソロ化と well-being」(仮題)というタイトルでお話いただき、その後質疑応答を予定しております。さらに、会員による研究発表も複数予定しております。研究発表の申し込みおよび参加等については、プログラムと共に支部のホームページに掲載いたします。

## 東北支部第 26 回研究大会

日時：2025 年 12 月 13 日(土) 13:00～(最長)16:30

開催方法：オンライン(Zoom)

プログラム概要：

基調講演 「ソロ化と well-being」(仮題)

金井 辰郎先生 (東北工業大学)

研究発表 (最大) 4 件

支部会議

お問い合わせは宮曾根(mittie[@を入れ  
る]tohtech.ac.jp)までお願いいたします。


## 中部支部



(支部長 毛利 雅子)

## 1. 2025 年度中部支部研究会

2025 年度の中部支部研究会を、9 月 27 日 (土) に名城大学ナゴヤドーム前キャンパスにてハイブリッド開催をしました。

今回は、「領域横断的な交流を目指して：これまでの研究の流れと今後の展望」をテーマとして、以下 5 人の先生方に発表頂きました。

- ① 友池梨紗先生 (愛知淑徳大学 グローバル・コミュニケーション学部) 「結婚相談所のコンシェルジュとの対話が婚活支援サービス利用者の結婚活動に与える影響」
- ② 中村文人先生 (愛知淑徳大学 グローバル・コミュニケーション学部) 「現代の国内社会の安定性とマス・メディアの役割に関する考察－Watchdog Journalism の観点から－」
- ③ 榎葉佑保先生 (愛知淑徳大学 グローバル・コミュニケーション学部) 「英語教育を通して、どのように学習者の感情表現スキルと自己理解の向上を促進させられるか」
- ④ 佐倉真盛先生 (名古屋大学大学院 教育発達科学研究科) 「Mediated Contact Intervention for Autism Stigma: The Power of Music」

- ⑤ 河村まい香先生 (明治大学大学院 情報コミュニケーション研究科) 「日本国内の企業における上司-部下関係の変容プロセス —コンフリクトの調整方法に着目した質的分析—」

対面参加は 22 名、オンライン参加は 7 名と多くの参加を受け、様々な視点からの研究・発表、またそれに伴う白熱したディスカッションを実施でき、大変充実した時間となりました。

## 2. 2025 年度中部支部大会・研究会

2026 年 3 月上旬に、支部大会として読書会・ビブリオバトルをオンライン開催予定です。詳細はまた決定次第、メールなどにてご連絡いたします。



## 関西支部



(支部長 日高 勝之)

**関**西支部では、11 月 8 日に、以下の要領で 2025 年度関西支部大会を開催いたします。関西支部会員の皆さま、および関西支部以外の皆さま (非会員を含む) も是非ご参加ください。【日時】 2025 年 11 月 8 日 (土曜)  
14:30～17:10 (予定)

【場所】 関西大学梅田キャンパス 702 号室

【大会テーマ】 (コミュニケーション/  
コミュニケーション学に関して)  
「『日本』を考えるために、私が薦めるこの一冊」

今回の研究会では、「コミュニケーション・ビブリオバトル」という企画を予定しております。コミュニケーションの理論や実践に関して、「日本」を考える上で、是非とも推薦したい書籍や論文を口頭でご紹介ください。指定発表者だけでなく、できる限り参加者全員にご発表いただきたいと思います。

参加申し込みは、以下のフォームよりお願いいたします。

<https://forms.gle/KFbwuA1CKxByQ7k36>

今回の企画では、可能な限り参加者全員の皆さまにご発表をお願いしたいと考えております。形式の整った研究発表としてではなく、ご自身の推薦・紹介されたい一冊・一本について情熱を持ってプレゼンテーションいただく企画ですので、どうぞお気軽にご参加ください！

なお、参加人数の把握と企画の調整のため、ご参加の申し込みはできるだけ研究会1週間前（11月1日（土））までをお願いいたします。当日まで参加申し込みは受付いたしますが、ビブリオバトル発表希望者は、大会の3日前までにご連絡下さい。

大会終了後に、会場近くにて懇親会も予定していますので、ぜひご参加ください。



(支部長 清宮 徹)

九州支部では、例年通りの3つの活動(支部大会、ニューズレターの発行、支部紀要の発刊)に加え、新しい試みを実施しました。「コミュニケーションリサーチ・ワークショップ」と題し、西南学院大学において9月8-9日の2日間、若手研究者を主な対象とした質的研究に関する実践的なワークショップを行いました。質的研究は実証主義的定量研究とは異なり、研究アプローチにおける定型的なフォーマットが明確でなく、逆に言えば、定型的な形にこだわらないのが質的研究の方法論上の特徴ともいえます。それゆえに、どのように研究したらよいかは多くの研究者が悩むところです。そこでそれぞれが持つリサーチの経験を共有することで、研究実践の蓄積が広がり、定性的研究の質的向上に大きく貢献するものと考えます。そこで、当ワークショップは大学の垣根を超

えて研究と教育を推進し、質的研究を発展させていくことを目的とし、若手研究者が先輩や研究仲間とともに学ぶ機会を持ちたいという趣旨で開催されました。講師として、宮原哲先生(西南学院大学)、池田理知子先生(福岡女学院大学)、吉武正樹先生(福岡教育大学)、Boris H. J. M. Brummans先生(モントリオール大学)、そして清宮が担当し、それぞれの研究経験を共有しました。編集長から見た研究ポイントをお話しいたいたり、インタビューや分析のコツなどをワークショップスタイルで議論したりしました。私の友人でもある Brummans 先生には、カナダのモントリオール大学からオンラインでお話しいたいただき、彼の民俗学的手法による研究アプローチをお聞きしました。参加者は九州支部会員に限らず全国からご参加いただき、15名による対面とオンラインのワークショップはとても充実したものとなりました。昼食を一緒にとるなど、和気あいあいとしたコミュニケーション研究のコミュニティも生まれました。この企画は今後もぜひ継続していきたいと考えておりますので、来年もご期待ください。また皆様からのご意見を積極的に取り入れ、より良いリサーチ・ワークショップにしていきたいと思っています。ご支援とご協力をお願いいたします。

続いて、九州支部大会のお知らせです。第32回九州支部大会を、11月29日(土)、沖縄産業支援センター(那覇市)において開催いたします。戦後80年の機会に沖縄を訪れることもあり、翌日30日(日)の午前中を使い、スタディツアーを計画しています。大会テーマは「コミュニケーション力再考」とし、宮原哲先生(西南学院大学)に基調講演をお願いしています。この度はポスター発表のセッションを設けるなど、新しい試みも予定しています。詳しくは、支部のホームページをご参照ください。また参加登録フォームは次のリンクからお願いします。

(<https://forms.gle/fbkzRYNhXzLXJJbt5>) 久しぶりの沖縄開催であり、多くの皆様のご参加をお待ち申し上げます。

また、九州支部活動のもう一つの大きな柱である、支部紀要『九州コミュニケーション研究』第23号が9月末に発行されました。第31回支部大会の特別セッション「コミュニケーション学は持続可能か」の3つの発表を掲載し、5つの研究論文と研究ノートが発表されています。さらに、支部のニュースレターが発行されました。新しく担当となった黒瀬菜々先生によって、ニュースレターがリニューアルされましたので、ぜひご覧ください。

支部大会や紀要、ニュースレターは、九州支部ホームページ (<http://kyushu.jca1971.com/>) にて閲覧可能です。

#### 連絡先

〒545-0021 大阪市阿倍野区阪南町  
1-50-3 (CR-ASSIST 内)  
日本コミュニケーション学会事務局  
06-6624-0027 [jca1971@jca1971.com](mailto:jca1971@jca1971.com)

#### 編集後記

10月の初めには真夏日に達するところも多かったですが、11月のはじめには東京と近畿で木枯らし一号が吹きました。年々秋が短くなっているような気がいたしますが、そんななかでも季節の移ろいを楽しんでいただければと思います。今回の表紙の写真を選んでみました。次回は来年2月初旬の予定で、その頃にはかなり寒くなっていると思います。ご覧いただいている皆様方におかれましては、どうぞご自愛いただき寒い季節を乗り切ってください。

広報局 ニュースレター担当 田島 慎朗